技術・家庭科（家庭科分野）における学び続ける子ども

技術・家庭科は生活に密着した教科である。そのため，家庭科における学びには，まず生徒自身が生活を見つめ直すことが大切となる。それによって，生活の中から課題を見出し，生活をよりよくしたいという願いをもった時に，「どうすればその願いを叶えることができるか」という問いをもつことになる。そのためには，自分にとってよりよい生活のイメージをもつことが必要となる。

生活がよりよい生活とはどのような生活をさすのか。それは，それぞれの家庭によって，また個人によって異なってくる。そのため，技術・家庭科では問いに対する答えは1つではなく，それぞれにとって最も望ましい『最適解』を導き出すことが大切となる。しかし，最適解を見出せば終わりではなく，それを実際に実生活に活かすことが望まれる。また，生活とは日々続いているものであり，変化していくものであるため，『最適解』を見つければ終わりではなく，そこからさらに新たな課題を見出し解決していくことが必要となる。このような形で，よりよい生活を追及するサイクルが生まれ，このサイクルこそ家庭科における学び続ける姿であると言えるのではないだろうか。

そして，『最適解』を導き出す中で，子ども達は問いを解決するために，多面的な見方や考え方をもち，主体的に追及していくことが必要となってくる。それには，この「課題」→「願い」→「問い」という一連の流れが大切な土台となり，その土台づくりとして，発達段階や学習の内容に応じた工夫が必要となるし，子ども達が，「何故そう考えるのか」「何故その方法がいいのか」と深めて考えるためには，教師の子ども達への適切な働きかけも必要となってくる。

今年度の小学校の公開授業研究会では，「松江の冬を快適に過ごすための作戦を立てよう～住まい方～」という題材でよりよい冬の過ごし方について考えを出し合う授業を行った。附属小学校には今年度の夏に教室にエアコンがついた。それを生かして，第1次では前年と比較することで夏に快適に過ごす要件を考えさせた。第2次では冬の快適な住まい方を取り上げ，公開授業では各グループで冬の過ごし方の提案を評価しあい，温度や湿度の調節に加え，健康面や経済面・環境面等も踏まえてよりよい提案ができるよう話し合いを行った。夏の住まい方の学習の資料や本授業の子ども達の発言等を見ていると，子ども達にとって，冬の住まい方を考えることは夏の住まい方を考えるよりも難しいようであった。よりよい提案には，地域の気候の特徴をより詳細に踏まえる必要があり，社会科や理科との連携を行うとより効果的な学習に繋がるのではないかと考える。

中学校の公開授業研究会では，「生活を豊かにするための工夫をしよう～ウォールポケット作り～」という題材で，生活を豊かにする布製品づくりの授業を行った。この授業は2年生の授業で，1年次に住まいについて学習していることから，宿題として住まいを見つめ直して来ることで1年次の学習を思い出させること，また，住まいへの願いを考えて，ウォールポケットをどのように住まいに役立つ物になるかを作品に反映させることで，家庭科の中の違う領域を関連させる意味ももっている。また，デザインを考えるにあたって，友達から意見をもらうことによってどのように改良すればよいか考え，一方で，自分の技能でそのデザインの作品を完成させられるのか，自分自身を見つめ直すことにもつながっている。

家庭科は時間数が少なく教えることができる内容が限られていることから，他分野や他教科と関連させて学習させるかを考えることが授業づくりの1つのポイントとなってくるとも言える。今回の公開授業研究会では住まい分野が取り上げられたが，住まいは非常に大きいものであるため，児童や生徒にとっては衣・食等他分野に比べて考え辛い部分が多い分野であるとともに，教員にも苦手意識を持つ者が多いと言われている分野である。しかし，逆に言えば，住まいの中で家族の生活が行われることを考えると，家庭科の他分野と，また教科と様々な関連のさせ方がある分野であるとも言える。連携を工夫することによって，より子ども達に多面的な見方・捉え方をさせることにも繋がっていくだろうし，それが学び続ける姿に繋がっていくと考える。

（共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座，正岡　さち）